

## 能「砧」の修辭と構想

——故事引用の方法及び女のドラマとしての視点——

稲 田 秀 雄

### はじめに

劇を推進せしめる力とは何か。それはいかなる人物に、どのようなかたちで担われているのか。劇中における人物の位相はいうまでもなくその人物をとりまくべく設定・仮構された人間関係において決定付けられるはずである。人物のなす行為もまた仮構された人物関係の中で固有の意味を持ち、その行為の結果は劇の結末へ向けて然るべく方向付けられる。人間関係の設定と劇中人物のなす行為の動機付け及びその結果、こうした事項は演劇の構想・構造を分析する際、看過することのできない重要な要素である。

中世演劇たる能を考える上においても、右のような視点は有効であるはずだ。むろん能の構築するドラマの様相は、近代劇のそれとは大いに異なっているのだが、なおそこには固有の作劇法が存在す

るに違いない。単なる形態上の分析や出典（本説）の指摘のみに終ることなく、あくまで能固有の構想（それは後述するように一曲の叙述の方法——修辭の方法といつてもよい——と深く関わっている）や構造をとらえる方向で、考察してみたいのである。

そこで、本稿においては世阿弥晩年の傑作とされる「砧」をとりあげ、その構想を特に叙述の方法（具体的には故事引用の方法）から照射するかたちで、この曲のもつドラマの意味を探るべく、ささやかなアプローチを試みることにする。

### 一

「砧」が世阿弥の作能中においてのみならず、能全体の中で最高の傑作たる位置を占めている事情については、もはや贅言を要さない。『申楽談儀』における「末の世に知人有まじ」との世阿弥の言

葉も喧伝されて久しい。

「砧」の作品としての評価は専らその詞章の美しさに集中してきたといえる。その緻密な言葉の綾を解きはぐす試みとしては、つとに五十嵐力氏・能勢朝次氏の詳細な鑑賞・注釈があり、金井清光氏・八嵐正治氏・表章氏・里井陸郎先生等のこの作品をめぐるすぐれた考察も大筋においては何ら異論をさしはさむ余地はない。

しかしながら、本稿であえてこの能としての詞章の美をきわめた傑作を取り上げる意図は、先に示したような演劇としての分析を基本とし、そしてその構想を修辭の方法と関連付けて考えようとするところにあり、そこに先学の視角とは若干の相違が存する。特に「砧」の中で引かれる蘇武の故事の意味及び本曲を女のドラマ、として評価するという二つの視点については、まだ考察を掘り下げ得る余地を残しているものと考えるのである。

「砧」において設定された人間関係はいかなるものか。まずこの点を明らかにしておかねばならない。主たる登場人物は、芦屋の某の妻（シテ）、芦屋の某（ワキ）、侍女夕霧（ツレ）であり、その他に芦屋の某の従者（ワキツレ）、同下人（アイ）が登場する。すなわち「砧」の主軸となる人間関係はシテ・ワキの関係つまり夫婦（男女）関係であることは明らかである。それは他人の介在する余地のない密やかな（私）<sup>ワキツレ</sup>の関係なのである。夫は妻を想い妻は夫を

想うという関係が当然ここには予想されるのである。夫婦間における思いのヴェクトルは基本的にそうあらねばならない。

ところが「砧」においては、夫婦関係にまず大きな断絶を設けている。そこから劇は始発するのである。自訴のため在京して三年になる芦屋の某は、「あまりに古里のことも心なく」<sup>⑦</sup> 思い、侍女の夕霧を故郷に下すことにする。某が夕霧に伝える伝言は次のようなものであった。

この年の暮れには必ず下るべきよし心得て申し候へ

当座の慰めかはいざ知らず、これははるか海山を隔てた故郷の妻へ向けての予言であることは確かである。その夫の伝言を携えて夕霧は芦屋の里に下る。これが「砧」という能の始まりである。まず設定された妻と夫を隔てるはるかな距離、そしてその間をとりもつべく在地へ向けて出発する侍女、「砧」はその始発においてまず夫と妻間の断絶を埋めんとする意志をもって展開を起動させるのである。故郷の芦屋の里に着いた夕霧の前にシテたる某の妻が姿を現わす。登場第一声であるサシの謡は、

それ鴛鴦の衾の下には、立ち去る思ひを悲しみ、比目の枕の下には、波を隔つる愁ひあり、ましてや疎き妹背の中、同じ世をだに忍草、われは忘れぬ音を泣きて、袖に餘れる涙の雨の、晴れ間稀れなる心かな

というものであり、ここには現在のシテの境遇が的確に述べられている。「鴛鴦の衾」・「比目の枕」は男女仲睦まじい譬えとして周知のもの、それらは共に男女がひたと寄り添っているイメージでもある。そういうこまやかな男女の間柄であるから余計に、「立ち去る思ひ」・「波を隔つる愁ひ」は耐え難い。そしてさらにそれらに対置されて「ましてや」という語を蝶番にして「疎き妹背の中」であるシテの境遇が浮かび上がる。このような対比（対照）の方法は世阿弥がしばしば用いるところだ。男女一般の△深き妹背の中▽（鴛鴦・比目）にシテの固有の状況△疎き妹背の中▽がくっきりと対照されている。参考までに他の曲の例を掲げてみると、

高砂住吉の、松は非情の物だにも、相生の名はあるぞかし、ましてや、生ある人として、年久しくも住吉より、通ひ慣れたる尉と姥は、松もろともこの年まで、相老いの夫婦となるものを。<sup>⑧</sup>

〔高砂〕

この程は、鄙の住まひに慣れ慣れて、鄙の住まひに慣れ慣れて、たまたま帰る古里の、昔の春に引き替へて。今は物憂き秋暮れて、はや時雨降る旅衣、萎るる袖の身の果てを、忍び忍びに上りけり、忍び忍びに上りけり。<sup>⑨</sup>

〔清経〕

むかし仲鷹が、むかし仲鷹が、わが日の本を思ひやり、天の原ふりさけ見ると詠めける、三笠の山かげの月かも。それは明州

の月なれや、こは奈良の都の、春日のどけき気色かな、春日のどけき気色かな。<sup>⑩</sup>

〔野守〕

はからずも前二者〔高砂〕・〔清経〕は「砧」とはまた異なったかたちで妹背（夫婦）の関係を扱った能であるが、いずれも傍点を付した「ましてや」・「引き替へて」を境に、明確な対比（対照）を見せている。非情の松―生ある人、昔の春―今の秋と、その相対するイメージは鮮やかである。三番目の「野守」の例は一種の故事引用でもあって、やはり「それ」・「ここ」に置き換えられて指示される明州の月―奈良の春日という対照が明らかである。

このような細部の修辞でも、特に世阿弥の場合は能全体の構想に深い関わりをもったイメージを採用し効果を上げているといえよう。「砧」にもとれば、シテの登場第一声においてこの能全体が示している夫―妻の断絶（それはまず第一義的には空間的なものであるが、当然空間の隔たりは思ひの隔りをも誘い出す）のイメージ〔疎き妹背の中〕が、一方に濃密な男女の仲の譬えを置くことにより、対比的にあぶり出されているのである。注意すべき手法であろう。

続くシテとソレタ霧との問答でも、シテの内面に積もる孤閨の想いが言葉のはしばしに現われる絶妙さを見せるが、ここでは、遠く離れた都の夫を思い恨むシテの屈折した心情がかけはなれた二つの空間（都―芦屋の里）にあらたな意味付けをする。すなわち、「お

ん宮つかひの隙もなく、心よりほかに三年まで、都にこそは候しか」という夕霧の言葉に対し、シテが、

なに都住まひを心のほかとや、思ひ遣れげには都の花盛り、慰み多き折々にだに、憂きは心の憤らひぞかし、地鄙の住まひに秋の暮れ、人目も草も離れ離れの、契りも絶え果てぬ、なにを頼まん身の行くへ。

と述べするように、〈都〉に対する〈鄙〉の關係が現われてきたのである。花盛りなど慰みの多い花の都においてさえ憂きは生じるのであり、まして鄙に居る自分にはやその田舎暮らしに飽き果てている——とここにもまた、都—鄙の明確な対比におけるシテの境遇のあぶり出しが採用されている。「砧」の空間は、現前する舞台面としては九州芦屋の里が中心であるけれども、一方の極としてつねに〈都〉が意識されている。都と鄙、そこにいる夫と妻、このかけはなれた空間關係と人間關係の設定こそ、後に詳しく考察する蘇武の故事ときわめて深い関わりをもつのである。

さて、ここまで劇の展開を追ってみて、いくつか修辭（叙述）上の特色を指摘し、それが本曲全体の構想と密接に結びついていることを述べた。能における修辭法の問題は今後の考察において極めて重要な課題であると考えられる。むしろ従来より指摘されてきた掛詞や縁語の目も絞る駆使、和歌や詩文の引用等、〈つづれの錦〉

と称される超絶技巧的な謡曲の文体の特質をさらに掘り下げる必要もあるが、それは従来必ずしもその能一曲の構想との関連において分析・考察されてきたわけではなかった。今後我々のなすべきは、幾度も述べるように構想・構造論の一環としての修辭の考察であろう。その言葉がなぜそこに置かれるのか。それがどこから来たかという問題（出典の考察）ももちろん重要であるが、まずは謡曲の言葉として再生したそれらは、その曲固有の文脈の中においてこそ独自の意味を担い得るのである。その曲固有の文脈を規定するのはその曲の構想に他ならない。

こうした意味から、次に論じようとする故事引用—譬え引きの手法は、それ自体能の修辭法として従来さほど注目されていなかったものでもあり、さらには能の構想と深く関わって引用されていることと明白であるから、十分考察に値するといえよう。「砧」の作品としての比類のなさ（作詞上の評価によることももちろんである）を証しようとするとき、このような角度からの分析もなされるべき余地を残しているのではないか。

## 二

夫への不信に染められたシテの心情がさらに重く屈しようとするとき、舞台はあらたな展開を用意しつつある。続いての問答は、次

なる砧の段への展開を導き出す重要な機能を担っている（実はそこに蘇武の故事が引用されるのだ）。突然、シテの耳に届いたのは、何やら不思議な物音である。それは里人の打つ砧の音であった。この展開はたしかに唐突ではあるがそれだけに効果的である。聞き慣れているはずの砧の音に対して不審を抱くのは不自然といえは確かにそうであり、この箇所については諸家の様々な解釈がある。しかし演劇的な効果からみてこれは必ずしも不自然というには当たらない。シテが果たして日頃、から砧の音を聞き慣れているかどうかは問題ではなく（それはもはや劇の外にあることなのだ）、この場面、夕霧の突然の帰郷に心動くシテの心情を叙し来たったこの場面において砧の音が聞こえてこそ、意味がある。従って「聞き慣れているはずの砧の音さえ今は何なのかわからないほど心が乱れていると解すべきである」とする見解（金井清光氏）よりも、「平生心にも留めなかつた物が、折にふれて深く感を惹いた」とする五十嵐力氏の、あるいは「今までは何げなくききすごしていた砧の音が特別の意味とひびきをもつて耳朶を打った」とする里井陸郎先生の見解により明確にあらわれている、砧の音のこの場面における特別な意味を強調したのである。この砧の音に対する感応と「特別な意味」の発見（認知）がすなわち蘇武の故事を導き出し、自ら砧を打ち出すに至る劇の重要な転回点を設定しおおせる。「げにやわが身の憂きま

まに古言の思ひ出でられて候ふぞや」とのシテの詞が示す通り、「わが身」の憂きことを深く思い屈したこの時点におけるシテの心情とたまたま聞こえてきた砧の音とが出会って始めて、シテに思いもよらぬあらたな意味を知らしめるのである。そこで想起される「古言」とは次の如くである。

唐土に蘇武と言つし者、胡國とやらんに捨て置かれしに、古里に留め置きし妻や子の、夜寒の寢覺めを思ひ遣り、高樓に上つて砧を打つ、志しの末通りけるか、萬里のほかなる蘇武が旅寝に、故郷の砧聞こえけり、

これは一つの粹をもった伝承であり、異国の故事の引用がなされているわけだが、このような故事の引用の持つ意味や機能はいうまでもなく前後の文脈によって決定される。さらに続けて、節わらほも思ひや慰むと、とても淋しき呉織、綾の衣を砧に打ちて、心を慰まばやと思ひ候。

（傍点引用者・以下同）

とある通り、この蘇武の故事はこれからシテが砧を打ち出すための動機付けの意味をもつことは明らかであろう。三人称をもつて語り出された故事に続けて一人称（「わらは」）の意志が述べられる叙述の方法（その故事の中の人物のように、ありたいというわけである）は、一種の先例引用の方法でもあり、譬え引きというよりむしろ例引きと称せられるべきであろう。

能「砧」の修辭と構想

特定の故事を先例として引く修辭法は能に限らず広く日本の、特に中世の諸作品において頻繁に見出される。不安なる行為の裏打ちには必ずといってよいほど然るべき故事が引かれ、その行為を意味付ける。能における故事引用（譬え引きあるいは例引き）の方法全般についてはいづれ稿を改めて論じなければならないが、やはりこのような行為の意味付け―行動の指標としての故事引用はしばしば認められる。いくつか他の曲の例を掲げれば、「国栖」の中で浄見原天皇（天武天皇）をかくまった漁夫の老人が、天皇の食べ残しの鮎を芳野川に放そうとすれば、姥は放したとて生き返るべくもないと止めようとする。そこで老人は、

昔も去ためしあり。神功皇后新羅を平げ給ひしとき、戰の占かたにあの玉嶋川にて鮎をつり賜ふ。其ごとく、此君も二たび都に還幸ならば、へ此魚もなかいきざらんと、……

と、神功皇后の先例を引き、鮎の占方の例をもって、今放とうとする魚の生き死にをまた占方にかけてようとする。この他、「放下僧」前場で、牧野小二郎が引用する漢の李広の故事は親の敵を討つて孝となつた先例でもあり、また同時に兄を敵打ちに向けて説得する手段でもある。いづれ故事が一つの指標として遠からず為されるべき行為を指し示している機能には変りはない。また「舟弁慶」のクセなどはそれ全体が一つの例引きとなっており、ここでも陶朱公の故

事はそのまま義経の境遇に重ね合わされようとするのであり、陶朱公の如くあるべしとの静の願ひは義経の未来へ向けての、白拍子にふさわしい予祝・祝言たり得ている。

「砧」の場合も、蘇武のことが引かれるのはそのような故事引用の方法の一環であるが、決定的に右のような諸曲とは異なる点が存する。それは例に掲げた諸曲では、神功皇后なり李広なり陶朱公なりといった特定の人物についての故事は、まさにそこ一箇所より他には引かれない事実である。「砧」における蘇武の故事はそうではなく、今の箇所を含めて都合三か所引用されているのである。このように特定の人物について一曲中に幾度も引用されるのは異例といわねばならない。長編の物語ならいざ知らず、一曲の能の中で集中的に一人の人物の故事が（譬えや先例として）引かれるのは、やはりその曲の構想の上でよほど重大な意味を故事が担っているからに違いない。

まずは最初にシテによって引用された蘇武の故事を仔細に検討してみよう。これは敵密にいうと蘇武及び蘇武の妻子に関する故事である。内容的には三つの事を述べていよう。

- (1) 蘇武は胡国に捨て置かれた。
- (2) その妻子は蘇武の夜寒を思いやって砧を打った。
- (3) その音が万里を隔てた蘇武の耳に届いた。

このうち(1)は周知の事柄である。蘇武という人物は、遠く漢書蘇武伝にその説話を発し、日本に至って多彩な展開を遂げた経緯はすでに先学の論究されたところである。「砧」に引用された蘇武の説話もそうした日本における変容と展開の中に位置付けられよう。まず(1)のモティーフは、はるかに故郷を隔てた胡国の地に残し置かれた蘇武の境遇を示す周知のものである。ところが次の(2)(3)はいかがであらうか。『東大寺誦誦文稿』、『今昔物語集』、『蒙求和歌』、『俊頼髓脳』、『宝物集』、『平家物語』諸本等に見られる蘇武説話(ないしはそれを下敷きにした修辭的引用)には全く見出せないモティーフである。このうち特に(2)については従来『和漢朗詠集註』との関わりが指摘されていた。たとえば内閣文庫本『和漢朗詠集私注』<sup>⑩</sup>では、

(241) 織錦機中 已并相思之字

擣衣砧上 俄添怨別之聲

(卷二 八月十五夜)

の下の句について

或本云蘇武<sup>(ト)</sup>胡也久居<sup>(ト)</sup>以不<sup>(レ)</sup>販其妻每<sup>(レ)</sup>秋擣<sup>(レ)</sup>衣<sup>(ト)</sup>為<sup>(レ)</sup>三<sup>(ト)</sup>以<sup>(レ)</sup>待<sup>(レ)</sup>シト夫<sup>(ト)</sup>云々

とあり、蘇武の妻が夫を思い秋ごとに衣を打って待っていたという伝承が明らかに注釈のかたちをもつて生じている。このあたり昨今関心の高まっている朗詠注の世界を探る端緒となりそうであるが、

能「砧」の修辭と構想

今はその力も余裕もない<sup>⑪</sup>。後考をまつとして、残りの(3)について考えよう。

(3)のモティーフもあるいは朗詠注の世界に見出されるかも知れぬが、今はまず日蓮遺文の存在を示しておきたい。日蓮遺文引用の蘇武説話については、すでに今成元昭氏が『平家』との関連を中心として考察されており、「砧」との関連においては佐伯真一氏も注目されていた<sup>⑫</sup>。が、能研究のサイドからはまだあまり分析されていないと思われるので、ここであえて紹介してみる。今成氏が編まれた「軍記物・説話関係日蓮遺文抄」<sup>⑬</sup>の中では、蘇武に関する引用は八か所見出される。とりわけ(3)との関連で注目されるのは二つ、まず弘安三年十一月二日付の『持抄尼御前御返事』に、

蘇武と申せしつわものは、漢王の御使に胡国と申ス国に入りて十九年、め(妻)もおとこ(夫)をはなれ、おとこもわするゝ事なし。あまりのこひ(恋)しさに、おとこの衣を秋ごとにきぬたのうへにてうちけるが、おもひやとをりてゆきにけん、おとこのみまにきこへけり。(傍線引用者)

とあり、弘安三年五月四日付の『妙心尼御前御返事』に、

あの蘇武が胡国に十九年、ふるさとの妻や子とのこひしさに、雁の足につけしふみ。安部ノ仲磨呂<sup>(ト)</sup>が漢土にて日本へかへされざりし時、東よりいでし月をみて、あのかすがの(春日野)の

月よとながめしも身にあたりてこそおはすらめ。(中略) ちんし(陳子) がかぐみ(鏡)の鳥のつねにつげ(告)ししがごとく、蘇武が(妻)のきぬたのこえのきこへしがごとく、さばせかいの事を冥途につげさせ給ふらん。(傍線引用者)

とある。前者には能「砧」に引かれる(1)(2)(3)のモチーフがほぼ出揃っており特に注目すべきである。後者も能「松山鏡」のクセに引かれる陳子の故事と対になっているのが興味深い。

ともかくここに能に先立つ蘇武の妻の故事が見出せたわけである。しかし注意すべきは、繰り返すように劇中で引用される故事の意味はその劇の文脈に照らして考察されねばならないことなのである。

蘇武の説話がもつ人間関係と今進行しつつある能「砧」における人間関係は明確にアナロジカルな設定をされている。いわばシテたる芦屋の某の妻は、ここで蘇武の妻たらんとするわけである。胡国にいる蘇武―それを思いやる妻の關係はそのままだに在る夫―それを思い恨むシテ(妻)の關係に重ね合わされる。はるかな空間を隔てて妻の打つ砧の音が聞こえたという感動的なモチーフは、やはり旧来の蘇武説話が孕んでいた△恩愛▽のテーマを妻の側からの視点をもってさらに倍加・強調せしめたといえよう。私が重視したいのは、このような妻(女性)の側からの発想を含んだモチーフを世阿弥がわざと採り上げた事実である。訴訟のため都に滞在する夫と

それを故郷で待つ妻という設定はおそらく当時の時代状況の中でむしろ日常的であった事柄の反映であるかもしれないが、それを普遍なるものにつなぎとめ得たのは、まさしくこの蘇武の妻の説話の導入であったのではないか。世阿弥は明らかに女性の側の発想(視点)によって一貫する劇を構想しているのである。

## 三

シテが砧を打つに至る第五段及び第六段(大系本『謡曲集』の段区分に従う)は前場における山場ヤマバトである。ここに展開される詞章の妙については改めて述べ立てるまでもないが、注意しておきたいのは、なぜ、何のためにシテの芦屋の某の妻は砧を打つのかということである。むろん、それは自らの思いを慰めるためのだが、さらにいえば、この能でシテの打ち出す砧の音は、とりもなおさず遠く離れた夫へ向けて妻より発せられようとする一種の△音信▽なのではないか。重要なのは砧の音なのである。先に引かれた蘇武の妻の故事においても力点は(3)のモチーフに置かれているといえよう。つまり、あの故事は遠くかけはなれた夫婦の間に(特に妻から夫へ向けて)一つのコミュニケーションが成り立ったという例と解すべきではないか。そしてまさに能「砧」のシテもそうした夫婦相互の意志の疎通を限りなく欲している状況にある。自らの胸の思いを慰

めるのみならず、さらに積極的な意味を、この擣衣の行為は担っているものと考えられる。彼女はせめて「思ひを述ぶる」便りとしてはるかな都の地にいる夫へ向けて、砧の音という△音信▽を伝えんとするのだ。

蘇武が旅寝は北の國、これは東の空なれば、西より来る秋の風、吹き送れと、間遠の衣打たうよ。

再び蘇武の名が引かれる。ここで蘇武と芦屋の某が対比的關係に置かれているのは明らかである。蘇武は北の胡國に捨てられ、芦屋の某はこの芦屋の里より東にあたる都にいる。蘇武と某が対比的に置かれた修辭法は、シテがあくまで蘇武の妻の故事をなぞるために砧を打つことをさらに強調しているといえよう。そして風のイメージがこのあたりの詞章にはふんだんに鑲められている。いうまでもなく砧の音を伝えるのは風だ。風は妻から発せられた△音信▽の運び手である。ために、

古里の、軒端の松も心せよ、己が枝々に、嵐の音を残すなよ、今の砧の聲添へて、君がそなたに吹けや風。

との風に対する呼びかけも自ずから納得される。まさにシテにとって砧を打つことは、たんに衣をやらわらげる作業でもなく、夜寒を思い夫を待つ間の慰みのみでもない。それは「千聲萬聲の、憂きを人に知らせばや」という夫へ向けての妻の積極的な意志表示なのであ

る。

心凄き秋の夜に打たれる砧の音、それはすでに数多くの詩文や和歌にうたわれた、きわめて詩的・文学的イメージに富んだ生活音である。しかしこの能において、砧の音は虚空に響き拡がるのみではなく、明確な指向性を与えられている。在地の妻から都の夫（君がそなた）へ向かって恨みと期待を込めて打たれているのだ。さらにそうした砧の音に夜嵐や虫の音や悲しみの声、露・涙が交響して情趣の頂点をもたらしたとき、侍女夕霧があらたな夫からの伝言を伝える。

いかに申し候、殿はこの秋もおん下りあるまじきにて候

妻にとってはこの上もない打撃である。夫に我が思いを届けんとする擣衣のワザに詩情が高揚した極に突然もたらされた報せは、すぐさま前場の終結を導き出す。すなわち妻の死である。劇において、人物があるのつびきならぬ事柄を知るとき、それは劇の重要な展開を呼び起こす。蘇武の故事の最初の想起がそうであったように、この夕霧の詞も絶妙のタイミングをもって発せられる（ように仕組まれている）。砧の音はついに夫の耳には達しなかったのである。

アイ下人によるシャベリと触レを介して舞台は一転し、再びワキ芦屋の某の登場によって後場へと展開する。妻の死を知ってようやく帰郷したワキは、妻を弔うとて、今となっては亡き妻の形見とい

える砧（作り物で示される）の前に坐す。

先立たぬ、悔いの八千度百夜草、悔いの八千度百夜草の、蔭よりもふたたび、帰り来る道と聞くからに、梓の弓の未管よびに、言葉を交はず哀れさよ、言葉を交はず哀れさよ。

単なる弔いではなく、ワキは死霊を招く梓の弓の呪術によってシテの霊を呼び出そうとするのである。それはひとえに亡き妻と「言葉

を交はず」ためなのだ。この劇の中では、シテとワキは生きて直接に言葉

を交わし得なかった。何度も述べたように二人の間には大きな空間の隔たりが存したのである。それを埋めんとしてせめての思いに妻は砧を打ったが、その音は届かなかった。そして今故郷に下った夫の前に妻は不在である。この上、夫にできるのは幽冥境を異にした妻と交流するための梓の弓の呪術でしかない。——と以上の

ように考えれば、「砧」の構想が断絶した二つの時空をつなぎとめようとする交流コミュニケーションの試みを基軸にしていることは明らかではないだろうか。都と鄙に隔てられた夫婦は、今また現世と幽界に離れて存在する。前場で妻が砧を打ち都鄙の間によこたわる距離を超えて思いを届けようとしたのに対し、後場では夫が梓の弓の呪術をもって亡き妻をコチヲの世界（現世）に招き寄せ直接言葉を交わそうとするのである。きわめてアイロニカルな対応が前後両場にはあるといえよう。

梓の弓の音に引かれて登場した後ジテ（妻の亡霊）は恋慕への執心のために自らが受けねばならない冥土における苦患の有様を訴える。死後もまた砧を打たねばならない苦しみ、涙が砧に掛ければ火炎となる責苦が述べられるのだが、この砧に附与された多義的な意味についても注意を要しよう。それは形見でもあり、責め道具でもあり、また後に述べるように成仏の機縁ともなる物なのである。さて、亡者の訴えは次第に夫へ向けて絞られてくる。その極致においてまた登場して来るのは蘇武の名だ。

(a) げにまこと譬へつる、蘇武は旅雁に文を付け、萬里の南國に至りしも、契りの深き志し、浅からざりしゆゑぞかし。

(b) 君いかなれば旅枕、夜寒の衣現とも、夢ともせめてなど、思ひ知らずや恨めしや。

(a) は蘇武の故事としては最も著名な雁書のモチーフを踏まえた叙述である。しかし雁書の奇蹟を「契りの深き志し、浅からざりしゆゑ」だとするのは注目すべきところである。今成元昭氏のいわれる「新態蘇武談」<sup>⑤</sup>において、たしかに雁書の奇蹟は蘇武の望郷・恩愛の思いが凝った実現と解釈できるだろう。ところがその雁書の届いた先は、諸書いずれも漢王の宮廷なのである。雁書が直接妻子のもとに届いたとする伝承を今管見の限りでは見出しえない。雁書は元来、あくまでも蘇武が自らの生存を宮廷に知らしめんとしたもので

あった。つまりそれは公的、回路―臣下としての蘇武から漢王の宮廷へ―に沿って発信されたメッセージである。しかし能「砧」のこの場面では、その雁書（かりがき）のことが妻の亡霊の口から恨み言として発せられるにおいて、あらたな意味が附与されている。「契りの深き志し」がすべてに優先してしまっているのである。雁書を伝達せしめた要因はここで完全に、妻を思う真心という男女の私的、回路に沿ったものへと変容しているといえよう。これもまた女性の視点から意味付けられた蘇武説話なのである。そしてさらに「君」という二人称へ切り換えられることによって（b）、蘇武たり、えなかつた夫への非難のヴェクトルが設定される。蘇武とわが夫の対置により、一方は万里を超えてその音信が届くという奇蹟を実現せしめ、他方は妻からの思いを込めた砧の音を受信し得なかつたという、全く時空を異にする二人の男の存在が明確に对照される。

三度引かれた蘇武の故事はいずれもその文脈において固有の意味を担わされていた。しかもそれが三度とも妻によって引用されている——ということは妻の視点から意味付けられている——設定は十分注目に値する。世阿弥はあきらかに周知の故事を自らの構想にからめとった上で効果的に活用しているのである。

さて、劇においてその最終的な結末の付け方はきわめて重要な意味を持っている。限定された時間と空間の中で演じられねばなら

いという劇の根本的な拘束条件から考えて、出来事の生起と展開、その収束の仕方は作劇法上の要諦である。「砧」の場合は、妻の亡霊の（成仏）をもって劇は終結する。

法華読誦の力にて、法華読誦の力にて、幽霊正に成仏の、道明らかになりにけり、これも思へば假そめに、打ちし砧の聲のうち、開くる法の花心、菩提の種となりけり、菩提の種となりけり。

妻の亡霊の成仏を保証するものは何であろうか。一つは明らかに「法華読誦の力」であり、これは夫によって読誦されたものである。うから、妻を救いに至らしめるのは男性の側の、しかも仏法という公認された力である。宗教の力は能の世界においてはほとんどオールマイティである。しかしながら注意すべきは、このキリの詞章において再び砧が登場していることだ。「打ちし砧の聲」のうちに「法の花心」が開いたというのである。さすれば成仏の一方の保証はシテ自身の行為にもあつたわけである。他方では冥界にて獄卒の責めをこうむる契機となつた砧打つ行為が、キリにおいては逆に成仏の機縁としてあらたに意味付けられている。夫による弔い——通常の能ならばそれだけで十分な救いであるはずなのに、世阿弥はそれに加えて女性自身の生前の行いをも対置する。本来的には執心の基であるはずの砧（またはそれを打つ行為）がその価値を一転されて救

済の保証となったとするこの結末は、女性の側の視点に貫かれた「砧」の女の、ドラマとしての可能性を指し示してはいないだろうか。

## 結 び

以上、世阿弥の晩年の傑作といわれる能「砧」を、主として故事引用の方法に着目しつつ、部分の修辭をつねに全体の構想と関連付ける方向から考察してみた。このように見ると、「砧」における蘇武の故事は、能の成立においても、従来本説として指摘されている様々な詩句とあわせて重要な役割を果たしているといえるのではないか。八嶋正治氏は『新撰朗詠集』中の

賓雁繫<sub>レ</sub>書飛<sub>ニ</sub>上林之霜<sub>一</sub> 忠臣何在

寡妾擔<sub>レ</sub>衣泣<sub>ニ</sub>南樓之月<sub>一</sub> 良人未<sub>レ</sub>帰

を本説として重視しておられるが、確かにこの詩句に詠まれた人物を蘇武夫妻とするならば、「砧」の骨格となる素材はほぼ出揃っている感はある。けれども既述したように能「砧」で決定的に重要なのは、妻の打った砧の音が万里を隔てた夫の耳に届いたモチーフであり、それが日蓮遺文に見出される以上、こうした朗詠の詩句及びその注釈の世界だけでは本説を把握しきれまい。

日本において展開した蘇武の説話にはもともと、はるか万里を隔てた空間のあいだにコミュニケーションが成立したという〈奇蹟〉

の主題が含まれていた。そこに蘇武の妻からの発想が加えられ、蘇武説話は男女の恩愛を如実に示す例話へと変容した。こうしたモチーフの成立の事情については、今審らかではないが、日蓮遺文を手掛りにするならば、おそらく唱導関係の世界が成立の背景として予想されよう。

世阿弥は、そうした男女間の私的な世界へ傾斜した蘇武説話を採用し、訴訟のための在京というきわめて日常的な(当時としては)構想を一方で構えることによって、比類ない時空の拡がりを孕んだ能を創造したのである。蘇武の故事の劇中への嵌入がいかに効果的になされているかはすでに検討した通りである。その間を今日では想像しがたい距離感によって隔てられている二つの空間(都と九州芦屋の星)、そこに配された夫と妻、さらにその空間を結び付けようとする試み、このような発想はあくまで蘇武の故事への世阿弥自身の解釈において得られたのではないか。その解釈とは明らかに女性の側の視点に立ったものであった。

「砧」のシテ・芦屋の某の妻はたしかに自らの行いの結末までを完全に見通し得ていない。彼女の行動は侍女夕霧の帰郷によって起動し(直接的には蘇武の故事の想起である)、また夕霧の言葉によって打ちのめされ死に至る。このことはシテが劇を推進する力に本当になり得ているのかという疑問を呼びおこす。しかし結末におい

て見たように、シテの擣衣の行為は結果的には成仏に至る一つの機縁となっていた。もちろんそのことをかねてシテは知るよしもなかったはずであるが、シテを成仏に至らしめたのは外発的な力ばかりではなかったのである。そしてこの能は先に述べたように夫一妻の私的な関係を焦点に据えた点において特異であり、夫婦の愛の断絶とその回復の試みという主題を描きおおせた点においても相応に評価されるべきであろう。劇を推進するシテの力が不十分であるにもかかわらず、「砧」を能における女のドラマの一つの到達点とみるゆえんである。

なお能における女性の位相として重要なものに、母一子（親子）関係がある。これはきわめて大きな拡がりをもち、親子物狂の能などを含めて問題にしなければなるまいが、今はその中でも例え、「正義世守」や「女沙汰」（いずれも廢曲）のような曲に、劇を推進する力を獲得しつつある女性（母）の姿を見ることができるという程度の指摘にとどめたい。

能における女のドラマの発掘はまだ多くの可能性を秘めているのである。

- ① 五十嵐力氏『新國文學史』
- ② 能勢朝次氏『謡曲講義』、『能勢朝次著作集』第六卷所収
- ③ 金井清光氏「砧」『能の研究』第二部所収

能「砧」の修辭と構想

- ④ 八寫正治氏「作品研究「砧」」『観世』昭54・9。
- ⑤ 表章氏「八砧」の能の中絶と再興」『観世』昭54・10。
- ⑥ 里井陸郎先生「砧」『謡曲百選その詩とドラマ』所収。なお、この他、早歌の詞章との関係について「砧」を扱った論考に、外村南都子氏「早歌の両曲から能へー「井筒」「砧」の場合ー」『国語と国文学』昭57・9）がある。
- ⑦ 「砧」の引用は以下すべて堀池識語本（日本古典文学大系『謡曲集』上所収）による。
- ⑧ 伝信光自筆本（右同書所収）による。
- ⑨⑩ 元頼識語本（右同書所収）による。
- ⑪ 注③に同じ。
- ⑫ 注①に同じ。
- ⑬ 注⑥に同じ。
- ⑭ 能勢朝次氏も、この故事がシテが砧を打つための直接的な動機を示していることを指摘しておられる。注②参照。
- ⑮ 車屋本（日本古典全書『謡曲集』下所収）による。
- ⑯ この他「十訓抄」、弘安十年古今集歌注、「古今秘註抄」、「八幡愚童訓」、「宴曲集」巻四「鬻旅」、妙本寺本『覺我物語』、幸若舞曲「百合若大臣」等の中世の諸書に蘇武のことは引かれ、多武峰延年大風流「種武雁書事」にも仕組まれている。また能の中でも「砧」の他に「花筐」・「高野物狂」・「千手」・「人形」・「羊」・「広基」等に蘇武の故事は引用されている。
- ⑰ 山内潤三氏・木村晟氏・柄尾武氏編『和漢朗詠集私注』所収。
- ⑱ 季吟刊永濟注の『和漢朗詠集註』においては当該の詩句ともう一箇所、巻四擣衣に収められる「擣處睽愁・閨月冷」裁將秋寄塞雲寒」の特に

下の句について、蘇武の妻が砧を打って夫の帰りを待ったと注している。ただしその音が夫の耳に届いたことは見えない。なお、寛一本『平家物語』巻二「蘇武」に注するかたちで、朗詠注を中心とする「中世史記」の世界を探られた論考に、黒田彰氏「蘇武寛書——中世史記の世界から——」(『文学』昭59・11)がある。参照されたい。

⑲ 今成元昭氏『平家物語流伝考』前篇第一章第二節、第三章第二節、後篇第二章第一節等参照。

⑳ 佐伯真一氏「平家物語蘇武談の成立と展開——恩愛と持節と——」

(『国語と国文学』昭53・4)の注(13)参照。

㉑ 注⑲の書所収。

㉒ 注⑲に同じ。

㉓ 『法華経』は特に女人成仏の証しとして尊重せられた故であろうか。里井陸郎先生も「法華経だけは比較的女性に寛大であった」として、そのゆえに「砧」の女を救う力となり得たと考えておられたようである。注⑥の書参照。

㉔ 注④に同じ。

㉕ 詳しく述べなかったが、△間を隔てられた者の結びつき▽という発想は、第六段に引かれる「七夕」のイメージにも顕著に現われている。